# 強制労働記（於シンガポール）

朝倉郡夜須町　　藤田　一智

私の兵籍番号は「佐徴師６２３」、即ち旧帝国海軍、佐世保鎮守府所属の師範学校卒、徴募兵ということである。当時は、師徴兵とか師現と呼称され艦隊では一般の水兵より軍務は劣るが、進級は早く終戦時には、いわゆるポツダム上等兵曹となっていた。

昭和１８年４月１日、九州、沖縄、四国及び外地の師範出身の師徴３期生、３４９名は佐世保第二海兵団へ入団した。そして３ヵ月の新兵教育を終了するや、佐鎮所属の航空母艦、戦艦、重巡、軽巡の１０隻にそれぞれ分乗して、太平洋各地の海空戦に参戦した。しかし１４１名は乗艦と運命を共にし、県内５９名の同年兵中、２４名が再び教壇に立つこともなく２１、２才で戦死してしまった。

さて、戦争の記録は多くの人々が取りあげると思うので、私は敗戦後、シンガポールに抑留され強制労働に従事した苦痛の体験を書くことにする。昭和１９年１２月１３日、私の乗艦重巡「妙高」はサンジャック沖で再び被雷、航行不能となり、僚艦「羽黒」に曳航されシンガポールで砲台化してしまった。戦闘配置を失った私は、二度と帰ることもあるまいと思い退艦、水上特別攻撃隊「椿部隊」に志願した。

終戦を知ったのは、マラッカ海峡に浮かぶインドネシア領、ビンタン島の人家もないトンダンバビーという地点で特攻基地造成中であった。８月下旬？状況不明のまま我々７名の兵、現地人労務者４１人、大発で約１０時間？シンガポールの本隊に合流しようとしたが港を間違えて商港に入港した。そして警備中の英軍に有無をいわさず武装解除されてしまった。半世紀も過ぎ記憶も薄らいだが、１３里収容所、マレー半島のバドバハのゴム林、その他転々と移住する中、三日熱マラリアに感染してしまった。４０数度の高熱が続き、キニーネの薬もなく頭髪も抜けてしまった。

９月下旬、我々の部隊は再びシンガポールへ移動。かって英印軍収容の捕虜収容所に逆に収容され、強制労働に従事することになった。ここは、セレター軍港の近くの有刺鉄条網に囲まれた木造高床のアダップ葺き（椰子の葉）の小屋で、翌年６月復員するまでの住居となったのである。２年余の南方戦線に従事、気候的には慣れていたとはいえ、焼けつく太陽下の重労働は容易ではなかった。マラリアをかかえた身体で辛くも生きのびたのは苦しさのせいであっただろう。

毎日、数人ずつに別れいろいろな労働に従事した。荷役作業、線路工夫、セメント運搬やコンクリート割りの土木作業、艦船の錆落とし、煙突や罐掃除は真黒となり洗っても洗っても落ちなかった。最も苦しかったのは、５万ｔ浮ドッグの修復作業であった。薄暗いドッグ内で塗料剥ぎ錆落し、塗料の臭い、粉塵で息も絶え絶え、酸欠に喘ぐ池の鯉の如く新しい空気を求めハッチに走った。しかし、かって日本軍の捕虜兵だったのか、現場監督の英人は仇のように「カーマン。カーマン」とどなりたて追いまわす。まさに地獄そのものであった。

食事は、炊事班が準備したが、主として大豆飯にかんこん草入りの塩汁の朝食。朝食の残りをアルミの海軍食器に詰めた弁当。酷暑、栄養失調そしていつも空腹であった。梅干、たくあん、味噌汁がいつも話題となっていたのを思い出す。米軍放出のレーションというのを何度か配給されたがその美味しかったこと。しかし後で聞く酷寒シベリアの強制労働に比べると楽だったのかも知れない。

悲しい事件が起きた。同班の山田二整曹の事故死である。英船荷役作業中、クレーンのワイヤーが外れ鉄材の下敷きとなってしまった。血液O型の私は、英軍医により５００cc輸血。ふらふらとなったが一晩中全員必死に介抱した。だが、「喉から息がもれる」と微かに言いつつ息を引きとってしまった。ゴム林の中で枯木を積み遺体を焼き、あり合わせの容器に遺骨を納め、煙草の煙でお通夜をした。２０歳の好青年、あの激しい戦闘に生き残り、復員を前に命を落とすとは…。遺骨は復員に際して名古屋復員局に届けられたが、混乱の中、宮崎県出身以外住所も失い、この５０年墓参もできぬのが心残りである。

いつ復員できるのか。噂によると現在の船腹で日本人を復員終了させるには１０年かかるという。長期抑留に備え、毎日使う便所紙は木皮、ぼろ布等を煮て、縫針もワイヤーを切り研いで作った。南十字の輝く夜、収容所の庭で遥かふるさとを望み皆で歌った。歌はいつも「兎追いし…」や「…誰か故郷を思わざる…」となり涙したこともしばしばだった。

ところが、復員の知らせが思いがけず早く来た。昭和２１年６月半ば、復員船は米軍リバティー船。天にも昇る心地で手製のリュックに古毛布１枚、防暑服１着、若干の下着類、昭南靴２足の全財産を入れた。戦時中、南方各地に上陸して求めた私物、官給品の殆どは英軍に没収されていた。でも乗船がまた大変であった。いわゆる首実験である。戦時中の捕虜虐待、現地人迫害行為の調査である。英印軍現地人の見張る中をひとりひとり船のダッタルを上った。そして少しでも疑いがあれば再び下船を命じられる等、惨めであった。船がシンガポールの狭い海峡を経、広い海原に出て心からほっとした。間違いなく日本に帰れる。すし詰めの復員船も快適であった。空襲、雷撃もない安全な航海は初めてである。お互い、のびた髪、髭をハサミで刈り合い２週間後、名古屋港に入港した。数年ぶりの日本、青松白砂の海岸、色白の女性、しみじみ美しいと思った。

復員局で頭から白いＤＤＴの粉末で消毒され、３００円の旅費、数袋の乾パンを受領して満員の列車に窓から乗り込み、はやる心で故郷に向かった。戦後のインフレを知らぬ今浦島は、京都で２５円の芋駅弁に驚き、焼野原の広島に呆然となり、３日余かかり夜半、ぼろぼろの身体で帰宅した。でも出征時家族全員署名の日の丸は無事持ち帰った。

その後、復員兵登壇禁止（占領軍指令？）となり教職復帰はあきらめていたが、教職員適格判定書（第３３１号）が８月末に届き、再び教師となった。以来３４年いろいろな病気と戦いつつ中学教師を終え、平穏に余生をおくっている。

今、５０年前の昔に思いをおこすと悪夢を見ていたような気がする。こんなことが２度とあってはならない。我々の苦い、辛かった体験を次代の人びとが繰返すことのないよう祈念して投稿を終わりたい。